

カトリック穏健派とプロテスタント遵法者 —アンソニー・マンディと『サー・トマス・モア』—

勝 山 貴 之

I 序

近年、作者の宗教的立場を解明しようとする研究が注目されている。たとえば、シェイクスピアが隠れカトリックであったかどうかは、多くの研究者が関心を寄せるところである。シェイクスピアが隠れカトリックであったと主張するリチャード・ウィルソン (Richard Wilson) は、若き日のシェイクスピアが国内外のカトリック勢力のネットワークに取り込まれていった事実をつまびらかにし、劇作家の作品を、カトリック復興を密かに祈願したものとして読み直そうとする (2)。従来、自らの宗教的立場を明らかにしてこなかったとされるシェイクスピアの隠された一面に光をあてようとする研究である。そこには、己の信仰を公言することを憚らないカトリック殉教者たちとは異なった、もうひとつのカトリック信者の姿が浮かび上がる。自らのカトリック信仰を内に秘め、外見においては体制側に恭順の姿勢を示した隠れカトリックの存在である。作者の宗教的立場を解明しようとする批評の動向はシェイクスピアのみならず、周辺の作家にも及んでいる。シェイクスピアの同時代人であり、カトリック糾弾の急先鋒と見做されていたアンソニー・マンディ (Anthony Munday, 1560-1633) に対しても、実は隠れカトリックではなかったかの疑惑が浮上し始めた。ドナ・B・ハミルトン (Donna B. Hamilton) は、その著書 *Anthony Munday and the Catholics, 1560-1633* においてこの問題に真正面から取り組んでいる。

A Catholic loyalist, whether recusant or not, continued to hold Catholic religious views, but made political loyalty to England and the monarch a professed part of his identity. Such a person would not, for example, fight on the side of the Spanish Armada or plot to kill the queen. These positions are close and overlapping. As this book argues throughout, in terms of religion and politics, Munday fits within and across these rather nebulous and shifting categories. (xvii)

そしてハミルトンはマンディの作品の中にカトリック的要素を読み込んでいくことにより、彼の作品がイングランドにおけるカトリック・イデオロギーを維持するための意図的なプロパガンダとして機能していたと主張するのである。

Read with the Catholic elements in mind, Munday's work becomes not only newly accessible but purposeful, propagandistic for the Catholic loyalist position and conservationist in terms of preserving Catholic ideology in England. (xvii)

しかし果たしてマンディは隠れカトリックであったと断定できるのであるか。カトリック殉教者の半生を描いているからといって、作品『サー・トマス・モア (*Sir Thomas More*)』がカトリック側の宗教的イデオロギーを喧伝するものとなっていたかどうかは、大いに疑問の残るところである。この小論では、ハミルトンの主張するようにマンディが隠れカトリックとして自らの信仰に言及しようとしていたのかどうかについて、更には彼の作品がカトリックたちに向けてその心情を代弁するために創作されたものであったのかどうかについて、作品におけるカトリック的要素を再考することにより

検証してみたい。

II エリザベス政治体制とカトリック穏健派

従来から言われてきたカトリックとプロテスタントという二極分布は、近代初期の英国における人々の宗教的アイデンティティを語る際に不適當であることが、近年の研究により明らかにされている (Walsham 8)。ヘンリー八世 (Henry VIII) によって制定された首長法 (Act of Supremacy, 1534) は、英国国王を英国国教会の最高の首長であると定め、教皇からの分離独立を宣言したが、宗教教義の面ではカトリック的要素を多く残していた。また 1549 年に制定された一般祈祷書 (The Book of Common Prayer) においても、教義内容はカルヴァン主義に近く、義認説・聖書主義・予定説を採用しているものの、制度面ではカトリックに似た主教制度を採用していた。国民にとって英国国教会への帰依は、大陸の宗教改革の精神によるものというよりも、むしろ政府の政策の転換により体制側から強要されたものとしての印象が強い。

1559 年にエリザベスの定めた統一法 (Act of Uniformity) は、国教会の礼拝・祈祷の統一をはかり、教区教会における日曜日および祭日の礼拝出席を国民に義務付けていた。無断欠席する庶民には 1 シリングの罰金が科せられ、改宗に頑なな抵抗を示す地方豪族に対しては、月額 20 ポンドあるいはそれ相当の土地の没収が言い渡された。もちろんミサなどカトリックの儀式を執り行うことや、祈祷に参列することは固く禁止された。

しかしエリザベス政権が厳罰でもって取り締まろうとしたのは、カトリック信仰そのものというよりも現政権への抵抗であり、カトリック教徒らの反政府的活動を標的にしていた点は重要であろう。異端者として処刑されたのは、カトリック勢力の復興を願って現政権の転覆を謀ろうとする者たちであり、密かにカトリックの信仰を抱くことを理由に極刑に処せられることはな

かったのである。従って、近代初期の英国においては、国教会の礼拝に参列することが、君主への最低限の忠誠と服従の姿勢を表すものであったことを心に留めておかななくてはならない。たとえカトリック教徒といえども、定められた日に教会へと足を運ぶ者たちは女王への忠誠を誓うことと引き換えに、異端者としての処罰を免れたのである。彼ら隠れカトリックの存在は、一般に「カトリック穏健派（“Catholic loyalists”）」あるいは「教会派カトリック（“Church papists”）」の名で呼ばれている（Walsham 9）。

当然のことながらこれらカトリック穏健派による英国国教会の礼拝への出席は、ロバート・パーソンズ（Robert Persons）をはじめとするカトリック宣教師から厳しく断罪された。しかし同時に、政府の迫害を回避しようとするこうしたカトリックたちを擁護するパンフレットが盛んに出回ったことも事実である。宗教改革によって職を追われ、サセックスのカトリック貴族モンタギュー卿（Lord Montagu）の邸に身を寄せていたアルバン・ラングデール（Alban Langdale）は、カトリック教徒が体制側との直接の対立を避けるため、表面的に英国国教会に対して恭順の姿勢を示すことは容認される、との意見を表明していた。

And for a matter which might be made indifferent, to sterr trouble is not the best corse to quietnes. A man which dwellethe amonge the wicked muste lament the state and providently avoyde the perill of tentacion, and as muche as he may muste withdraw hym slfe from troble as a peaceable childe of the churche, not sekinge unnecessarily to provoke Ire. (qtd. in Walsham 53)

ラングデールが主張するようにカトリック穏健派にとっては、体制側との不要な摩擦をさけて、自分たちが現政権の治安を乱す不穏分子ではないことを表明することが賢明な策であった。

カトリック穏健派は、カトリック信仰を喧伝することによる政府との対立を最も恐れていたことは明らかである。ロバート・パーソンズの『次期英国王位継承をめぐる会議 (A Conference about the next succession to the crown of England)』が、1594年初頭にアントワープで印刷されるや否や、イエズス修道会総会長アクワヴィーヴァ (Aquaviva) はパーソンズに出版を思い留まるよう申し入れている。イングランドの次期王位継承問題を真正面から論じ、スペイン王室の王位継承権を主張するこの書物の出現が、イングランド国内のカトリック穏健派にとって大きな打撃となるのではないかと、の配慮によるものであった。総会長の案じたとおり国内のカトリック穏健派はこの書物を危険視し、この書物の内容を非難することによって、逆に自分たちの王権への忠誠心を表明する証としようとしたのである。

必然的に、反宗教改革の文学の中には、こうしたカトリック穏健派の内面的葛藤を、あるいは彼らの内面化された信仰心を主題としたものが見うけられる。カトリック復興を願って英国に密かに渡ったイエズス会士ロバート・サウスウェル (Robert Southwell) の詩も、その一例であろう。彼は、新約聖書の中から使徒ペテロの裏切りを題材とした『聖ペテロの嘆き (Saint Peters Complaint)』を執筆し、処罰を恐れてイエスを裏切ることとなる人物の内面の葛藤を表現したのである。

しかし興味深いのは、この詩がカトリック穏健派ばかりか多くのプロテスタント読者をも獲得したという事実である。既にサウスウェルの処刑前から評判になっていたこの作品に書籍商たちは目をつけ、処刑の執行された1595年の初版以来、1596年、1597年、1599年、1600年、1602年、1605年と詩集は版を重ね、1640年までの半世紀の間に13版が印刷・発行された (Shell 61)。こうした度重なる再版の記録が物語るように、サウスウェルの詩は必ずしもカトリック穏健派の読者層ばかりを対象にしたものではなく、プロテスタント読者の関心をも惹きつけたに違いないと思われるのである。

更に、1590年代に登場した多くの詩人の作品は、サウスウェルの影響を

色濃く残していることもまた事実である。W. ブロクサプ (W. Broxup) の『天上の至福へと通ずる聖ペトロの歩んだ道 (*St Peters Path to the Joys of Heaven*)』(1598), サミュエル・ロウランド (Samuel Rowland) の『キリストへの裏切り (*The Betraying of Christ*)』(1598), ガーヴェズ・マーカム (*Gervase Markham*) の『愛される者の涙—聖ヨハネの嘆き (*The Tears of the Beloved: Or, the Lamentation of Saint John*)』(1600), G. エリス (G. Ellis) の『迷える羊の嘆き (*The Lamentation of the Lost Sheep*)』(1605)などはすべて、サウスウェルの影響のもとで執筆されたと考えられる (Shell 79)。彼らの作品が多くの読者を獲得した事実を念頭におくなら、カトリック穏健派の内的葛藤を巧みに表現したように思えるこれらの詩作品に、感銘を受け、共感を示すプロテスタント読者層の厚みが感ぜられる。これは作品の内容が、単なるカトリック信者の嘆きを超えて、人間一般の苦悩を描くことに成功していたからであろう。サウスウェルの逮捕(1592年)と処刑(1595年)とほぼ時期を同じくして、執筆・制作されたと考えられる劇作品『サー・トマス・モア』においても同じ状況が考えられるのではないだろうか。作品は、カトリック勢力に向けて書かれたというより、広くプロテスタントの観客の心にも訴えるはずである、との確信を持って創作されたと言えるのではないか。

Ⅲ カトリック的要素の排除

カトリック詩人であるサウスウェルの詩が、多くの読者をひきつけた事実を考慮すると、『サー・トマス・モア』の制作も興味深い事実としてとらえることができる。おそらくアンソニー・マンディのものといわれるオリジナル・マニエスクリプトにヘンリー・チェトル (Henry Chettle), トマス・ヘイウッド (Thomas Haywood), ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare), トマス・デッカー (Thomas Dekker) の筆が加えられ、更

に王室祝典事務局長エドモンド・ティルニー (Edmund Tilney) の手の入った、この芝居の制作年代はおおよその研究者の考えによれば、1593年とされている。確かに同年ロンドンで勃発した外国人排斥運動と劇中に描かれた暴動との関連を考慮に入れると、この年に創作された可能性が高いといえるであろう。もうすこし早い時期1592年またはそれ以前の創作可能性も考えられなくはない。1591年は国教忌避者としてカトリックの処刑が15人(当時最も多かった1588年の31人に次ぐ数)と多かった年であり、政府のカトリック教徒に対する弾圧との相関関係も指摘できる。しかし先に指摘した1592年にサウスウェルが逮捕されたことなども考え合わせると、1593年あたりの可能性が再び浮上する。現実世界の出来事が人々の関心を集めるなか、劇の主人公トマス・モアの殉教は当然のことながら観客を劇場に引き寄せる格好の題材であったであろう (Munday 11-17, Hamilton 119)。

当時マンディは、カトリック教徒捜索・逮捕において辣腕をふるっていたリチャード・トプクリフ (Richard Topcliff) の右腕ともいえる存在であった。サウスウェルを逮捕したのもトプクリフであり、劇の重要な材源のひとつとされているカトリック助祭長ニコラス・ハーブスフィールド (Nicholas Harpsfield) の手になる『サー・トマス・モアの生涯 (*The life and death of Sr. Thomas Moore*)』の原稿もまた、カトリック教徒の書齋からトプクリフによって発見、没収されたという (Munday 8)。メアリ政権の下、ローマ・カトリック殉教伝の執筆に取りかかったハーブスフィールドの筆によるモアの伝記は、エリザベス政権によって出版を禁止された。しかし原稿は、密かにカトリック穏健派の人々の間で回覧された可能性が高いと思われる。トプクリフの指示のもと、カトリック教徒糾弾のため没収したハーブスフィールドの書物を精読していたマンディが、後に伝記から得た知識を自作の劇の中に組み込んだことは充分考えられるのである。

何故カトリック教徒の摘発という仕事に手を染めていたマンディが、カトリックの殉教を描くこの芝居の執筆を思いついたのかは一考に値する問題で

ある。ドナ・B・ハミルトンは、この部分をマンディ自身がハーブスフィールドと同じく、カトリック殉教の物語に大きな関心を寄せていたからだとしている。

... the sequence of actions that begin with 4.1 and continue to the end of the play is dominated not by political action and analysis but by affective moments, characteristics of Acts 4 and 5 that suggest that Munday, like Harpsfield, was interested in the martyrological and hagiographic aspects of this story, in combination with the power of the story to represent sorrow and loss. (123)

しかしマンディの『サー・トマス・モア』は、カトリック殉教を描いているからといって、果たしてカトリック復興のプロパガンダとなりうるものなのであろうか。ここで作品の中に描かれるカトリック的要素について、今一度確認してみたい。

作品の中には、モアのカトリック信仰が真正面から取り上げられる部分は見あたらない。たとえば第4幕1場では、ヘンリーからの使者の示す法令に対して署名を拒むロチェスターの司教（Bishop of Rochester）とモアの様子を描かれるが、この法令の内容は明らかにされていない。歴史的事実に照らしあわせれば、この法令は1533年にモアに示された“Articles devised by the whole consent of the King’s Council”，あるいは1534年4月13日にモアが署名を求められた“the Oath of Supremacy and Act of Succession”と考えられるが、劇中にはこれを明示する箇所は存在しないのである。むしろ科白の上では、注意深く法令の内容への言及が避けられている。

Palmer. My lords, his majesty hath sent by me

These articles enclosed, first to be viewed
And then to be subscribed to. I tender them
In that due reverence which befits this place.

With great reverence.

More. Subscribe these articles? Stay, let us pause:

Our conscience first shall parley with our laws.

My lord of Rochester, view you the paper. (IV. i. 69-75)

「これらの法律条項 (“these articles”)」とのみ言及される法令が、何を指しているのかは不明である。法令への署名を拒絶する理由として、科白の中でモアの信仰上の問題が明らかにされることはない、という事実を確認しておきたい。¹

またモアの殉教の場においても、材源に見られるようなモアの信仰の告白は描かれていない、という事実も忘れてはならない。

Shrewsbury. My lord, 'twere good you'd publish to the world
Your great offence unto his majesty.

More. My lord, I'll bequeath this legacy to the hangman, and
do it instantly (*gives him his gown*). I confess his majesty
hath been ever good to me, and my offence to his highness
makes me of a state pleader a stage player (though I am
old, and have a bad voice) to act this last scene of my
tragedy. (V. iv. 68-75)

これに対して、材源と見做されているニコラス・ハーブスフィールドを紐解くと、断頭台に立ったモアの最後は次のように語られている。

Then desired he all the people thereabout to praye for him, and to beare witness with him that he should nowe [there] suffer death in and for the faith of the holy Catholike Church. Which done, he kneeled downe, and after his prayers sayde, turned to the executioner, and with a cheerfull countenance spake thus unto him: "Plucke vp thy spirites, man, and be not afraide to doo thine office. . . . (Harpsfield 204)

ハープスフィールドの原稿では、カトリック教会のための殉教を表明するモアのことばが明らかにされている。

同じ箇所を、別の材源とされるカトリック司祭トマス・ステイプルトン (Thomas Stapleton) の『トマス・モアの生涯 (*Vita Thomæ Mori*)』に辿ると、

On the scaffold he wished to speak to the people, but was forbidden to do so by the Sheriff. He contented himself, therefore, with saying: "I call you to witness, brothers, that I die the faithful servant of God and the King, and in the faith of the Catholic Church". Such were his words; and in truth no one in the kingdom could be matched with him for fidelity to the King: God he served with the greatest zeal and holiness of life: he died not only in the Catholic faith but on its behalf. After that, kneeling down, he recited aloud the fiftieth Psalm: "Have mercy on me, O God". (Stapleton 188-89)

と綴られており、ここでもカトリック信仰を守りとおそうとするモアの殉教の姿勢は明白である。著者のステイプルトンはエリザベスの即位と同時にイングランドから低地帯 (the Low Countries) へと逃れ、1588年ドゥエイ

(Douai) でモアの伝記を出版した (Munday 8). 原語はラテン語であるが、マンディはラテン語にも堪能であったことから、劇の重要な材源のひとつと目されている書物である。ハーブスフィールドもステイプルトンも、『サー・トマス・モア』の材源として挙げられているものの中で特にカトリック色の強い書物であるが、マンディはこれらの書物に触れながら、細心の注意を払ってカトリックの要素を劇の科白から排除していることが理解される。

Ⅳ カトリック穏健派とプロテスタント遵法者

果たしてマンディはカトリック勢力に向けて、彼らの心情を代弁するために、『サー・トマス・モア』の執筆を思いついたのであろうか。作品の中でモアのカトリック信仰告白が削除されている一方で、劇が前面に押し出しているのは、英国国教会とカトリックの対立という宗教問題よりも、王への忠誠心と個人の内面の問題だと考えられる。

この点で詩人の役割をめぐるモアとサリー伯爵の議論は示唆に富んでいる。「詩を学ぶことは私たちの運命を向上させてはくれません。詩は国家には無用の長物と考えられてきましたから (“It is a study that makes poor our fate: Poets were ever thought unfit for state.” III. i. 194-5)」と、詩の効用を悪し様に言うサリー伯に対して、モアは詩こそは至高の芸術であると詩を弁護する。

More. O give not up fair poesy, sweet lord,
 To such contempt. That I may speak my heart,
 It is the sweetest heraldry of art
 That sets a difference 'tween the tough sharp holly
 And tender bay tree. (III. i. 196-199)

「たおやかな月桂樹」が詩人に与えられる栄冠とするなら、「丈夫で棘のある柵」は国家を動かす政治家が晒されることとなる冷酷非情さであろう。自らを詩人の立場に立つものとして位置づけるモアは、政治的判断のみを優先させようとする時代の風潮に一矢を報いようとする。

More.

Why, I'll show the reason.

This is no age for poets: they should sing

To the loud cannon *heroica facta*:

Qui faciunt reges heroica carmina laudant;

And as great subjects of their pen decay,

Even so unphysicked they do melt away. (III. i. 202-207)

政治の便宜性と対極に位置するものとして詩が存在するとするのなら、それは王の意向とは相容れない個人の内面、あるいは個人の良心ともいえる部分ではないのか。モアのカトリック信仰の部分は言及されないまでも、彼の内なる詩人的要素は、たとえそれが自分の人生を大きく左右する決断であろうとも、己自身の内なる良心の声に従って生きることを主張してやまない。

この箇所注目して、デイヴィッド・ベヴィングトン (David Bevington) は、作品からカトリック的要素を薄めることにより、ここに描かれたモアの内面の葛藤が、より多くの観客の共鳴を得られたに違いないと指摘している。ハミルトンの主張するマンディ＝カトリック説とは対立するものとして、ベヴィングトンの意見は傾聴に値する。

In understated fashion, *Sir Thomas More* illustrates the inevitable relationship in the 1590's between issues of private conscience and obedience to the Tudor state. More himself is no rebel. Yet the very magnanimity of his spirit eloquently indicates

his willingness to suffer for an inner faith. His stance, since it is not labeled Catholic, appeals to all those who are troubled in their religious allegiances. (256)

ここでベヴィングトンは、「宗教的忠誠心に悩む人々」とのみ述べ、これ以上詳しく人々の信仰について解説しようとはしない。しかしこの点についての考察は、時代の宗教を語る上で重要であろう。

メアリ時代のカトリック復興の後、エリザベス政権による1559年の宗教改革によって民衆の信仰上の啓蒙が順調に進められたとはいえない。イエズス会が英国に派遣する宣教師たちに比して、英国国教会の聖職者たちはあまりにも非力であり、民衆の間に根付いたカトリック信仰による聖人崇拜や聖遺物崇拜を一掃することは容易ではなかった。カトリシズムは、たとえ教義として破棄されようとも、民衆の生活や思想信条の中に深く根を下ろしていたのである。更に、民衆レベルにおける反カトリック思想は、カルヴィニズム教義に対する表層的な理解に留まっており、改革後30年間以上にわたって、英国民衆は信仰面における不安と混乱を経験していたといえるであろう。従って、英国国教会への改宗は遵法精神に則った国民の義務としての側面が強く、英国国教会の教会で行われる礼拝への参加が、民衆の内面とは遊離した形式的な信仰の表明になっていたことも否めない (Walsham 100-119)。

1582年、エセックス州モルドン (Maldon) の聖職者であったジョージ・ギフォード (George Gifford) は、民衆におけるプロテスタント信仰の薄さを嘆いている。

the most in number . . . having Poperie taken from them, and not taught throughly and sufficiently in the Gospell, doe stand as men indifferent; so that they may quietly enjoy the world, they care not what religion come: they are like naked men, fit and

ready for any coate almost that may be put upon them.

(Gifford sigs A2v-3r)

同じく、前年1月ポールズ・クロス (Paul's Cross) における説教でオックスフォードの聖職者ジェームズ・ビッセ (James Bisse) もまた、プロテスタントの墮落について非難のこぼを浴びせている。

But alas for pitie, alas for shame, are not many that beare the name of Protestantes, and Gospellers, inferiour too them? We use our libertie as a cloake of loosenesse, wee turne the grace of God into wantonnesse, and the glorious Gospell of Jesus Christ into lewdnesse. Are not wee come from the excesse, to the defect? from blinde zeale, to wilfull ungodlinesse? from ignoraunce in darknesse, to wickednesse in knoweledge? from many Gods, to noe God? from papisme, to Athisme? from superstition, to irreligion?

(Bisse sigs D5v-6r)

宗教改革は、カルヴィニズムの教義への理解と共鳴というよりも、国家の法律に従うことだけを念頭において国教会に通う民衆を生み出したことは事実であろう。ある意味において、プロテスタント遵法主義者とカトリック穏健派の境界線は非常に曖昧なのである。

従って、『サー・トマス・モア』はカトリック勢力のための芝居ではなく、国家権力と個人の内面の対峙という問題を取り上げた作品であるからこそ、当時の人々が自らの精神的葛藤をそこに見出し、演劇的感動を覚えたに違いないといえるのである。そればかりか、英国国教会の「監督制度」や「長老制度」を忌避し、真実の回心と信仰告白に基づく「契約」共同体を誕生させようとして女王の施策と敵対したピューリタンたちでさえも、モアの科白と

自分たちの内的葛藤と照らしあわせて、そこに共鳴できる部分を見出したのではないか、という憶測もあながち間違っていないであろう。

先にも指摘したように、ハミルトンはカトリック殉教伝や聖人伝に対するマンディの関心と照らし合わせて、モアの殉教を美化するこの作品を舞台にかけようとした彼の動機を、あくまでカトリック穏健派としてのマンディのアイデンティティに求めようとする (120-23)。しかし共感を抱くことがそのままマンディ自身がカトリック穏健派であることとはならないはずである。更にハミルトンは、処刑の場における悲哀は、アリソン・シェル (Alison Shell) の指摘する当時のカトリック文学の特質とも共通すると主張する。

Sorrow and lamentation also mark the scene of execution (5.4),
and in ways that make Alison Shell's discussion of lamentation
as a topos of Catholic writing applicable to *More* as well. (124)

確かにアリソン・シェルは、サウスウェルが大陸の詩人ルイーゲ・タンシッコ (Luigi Tansillo) の詩に見られる特徴をイングランドに導入し、1590年代の詩壇に「涙を誘う長詩 (long lachrymal elegy)」というジャンルを確立したことを述べている。しかし同時にシェルは、サウスウェルの詩が多くの他の詩人に影響を与えたばかりか、このジャンルがカトリックのみならず多くのプロテスタントに受容されたことを指摘している点も見逃してはならない。

And, though most of these [poems under the influence of Southwell] were both written and published within the Protestant mainstream, Richard Verstegan published 'Saint Peeters Comfort' in his *Odes* (1601), and a similar poem occurs in a miscellany published openly but almost certainly taken from

a Catholic manuscript, *The Song of Mary the Mother of Christ and the Tears of Christ in the Garden* (1601). Like its poetic progenitor, they demonstrate how lamentation could be a genre equally acceptable to Catholic and to Protestant. (79-80)

サウスウェルの詩に描かれた「嘆き (lamentation)」という主題が、同時代の多くのプロテスタント読者を獲得したことを忘れてはならない。カトリック勢力が心打たれる詩の内容に、同じく感動を示すプロテスタントが数多くいたことを念頭におくなら、『サー・トマス・モア』の殉教に理解を示すプロテスタントの存在を当然のこととして受け入れるべきであろう。カトリック穏健派の内的葛藤を理解し、それに共感を示すプロテスタント遵法者やピューリタンを即座にカトリック教徒と定義することは誤りであろう。たとえ思想信条は違えども、人間の内的葛藤を描く詩的想像力や演劇的想像力においては、互いに共鳴しあう部分があったことを否定することはできないはずである。

マンディは、1582年に「エドモンド・キャンピオンとその共謀者の暴露 (*A Discoverie of Edmund Campion, and His Confederates*)」と題するパンフレットを出版している。そのなかではカトリックの叛逆に対する批判と弾劾が展開され、断頭台にたった殉教者の堂々たる最後の様子が記されている。その職務からカトリック殉教者と直に接触をもったに違いないマンディは、殉教者たちが国家権力と敵対しつつも、あくまで己の信念に忠実に生きようとする姿に、ある種の感銘を覚えたのかもしれない。またマンディの経歴を考えるのなら、たとえ彼が『サー・トマス・モア』のような殉教者を主人公に据えた芝居の執筆に手を染めたからといって、それを理由に体制側から隠れカトリックの疑いのある要注意人物として警戒されるかもしれないなど、彼自身思いもよらなかったのであろう。

V 結び

リチャード・ロウランド (Richard Rowland) も指摘するように、マンディは晩年、聖ステイーヴン教区内のコールマン通り (Coleman Street) へと住まいを移している。この地区はロンドンでも最も過激な清教徒の居住区として知られた地域である。彼はこの地区に移り住み、教会へ通い、教区への経済的負担も果たし、この地に埋葬されることを望んだ。ハミルトンが主張するように、仮にマンディがカトリック穏健派であったとするなら、この事実はどのように説明すればよいのか。

ハミルトンは、マンディがカトリック穏健派であったが故に書かなかった部分、あるいは真正面から書けなかった部分に注目し、そこにマンディの真の宗教アイデンティティを見出そうとする。マンディが、カトリック神学に対する体系的な批判を加えていないことを重視し、王権への忠誠を表明しつつもカトリックの立場を正当化する題材に取材したことから、彼の信仰的立場がカトリック穏健派であったと主張する。

As for any presence of specifically Protestants ideas, one will find denunciations of the pope and sporadic attacks on relics and images, but no organized critique of Catholic theology. By the same token, Munday does not articulate a Protestant spirituality. These absences do not, however, make his work non-religious. Invariably, his work responds to, and is best contextualized in relation to, contemporary religious-political situations In his responses, Munday routinely acquits himself of the obligatory representation of loyalty, but mixes that with other material that validates the Catholic position. (xvii)

しかしマンディがカトリック殉教という題材を取り上げたことを、そのまま内なるカトリック信仰の表明として捉え、彼の信仰黙秘をもって、彼をカトリック穏健派と断定することはできないはずである。むしろマンディが抱いたカトリック穏健派に対する共感があるとすれば、彼独自のものではなく、時代を生きた多くのプロテスタント遵法者たちも抱いていた共感であることを指摘しておきたい。それは国家権力と個人の内面の対立を描いた作品の主題への共感であり、そこに存在する宗派を超えた文学的想像力の可能性を重要視したい。全く同じことが、シェイクスピアにも言えるかもしれない。リチャード・ウィルソンは、シェイクスピアが書き残さなかった部分から、当時の政府の宗教政策に対する劇作家自身の立場表明を読み取ろうとする。しかしウィルソンのアプローチが、カトリックとプロテスタントの対立を鮮明に読み込みすぎる危険性を忘れてはならない。両宗派の共有する詩的・演劇的想像力こそ、文学批評において重視されるべき部分であろう。

注

- 1 ハミルトンもまたこの法令への言及がなされない事実を指摘しているが、むしろそれが繰り返し言及されている事実注目しようとしている。“While avoiding direct reference to it – the order that comes from the court is expressed only as a request to subscribe to ‘articles’ (4.1.70)—Munday nevertheless made an issue of Henry’s requirements three times in one scene (4.1).” (123) 王室祝典事務局長ティルニーが、この場面全体の削除を命じた書き込みがテキストに残されている。しかしティルニーの検閲は、字句にこだわったものが多く、その背後にある思想的内容を問題視したものではない。Richard Dutton は、ティルニーの検閲について次のように述べている。

But there is no getting away from the fact that, in an Elizabethan context, the subject matter of the play is about as daring as one could imagine, however discreet the handling of particular items. It depicts a man of acknowledged probity defying a Tudor monarch, and suffering the penalty; the issue at stake is the Act of Supremacy, on which the

Elizabethan settlement was based; it could easily be constructed as a rallying cry to Roman Catholic resistance. Yet, with specific changes, Tilney was apparently willing to see it appear on stage (though we do not know if it ever did so). This suggests that Elizabethan political censorship was a good deal more liberal than it is sometimes given credit for being. . . . their censorship of plays, at least, seems to have been more pragmatic than doctrinaire. (86)

ティルニーは、劇団側から検閲料として収入を得ていたこともあり、できるかぎり作品が上演にこぎつけることができるよう配慮したと思われる。ある意味において当時の検閲官の立場は、劇団側と共犯関係にあったと言えるかもしれない。こうした検閲のありかたが、第4幕2場において Roper's wife によって語られる "rood" の箇所は特に検閲の対象にならなかったことを、説明するものなのかもしれない。

参考文献

- Bevington, David. *Tudor Drama and Politics: A Critical Approach to Topical Meaning*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1968.
- Bisse, James. *Two Sermons preached, the one at Paules Crosse the eight of Januarie 1580. The other, at Christes Church in London the same day in the afternoone 1581*. London 1581.
- Bossy, John. *The English Catholic Community, 1570-1850*. London: Darton, Longman & Todd, 1975.
- Clare, Janet. 'Art made tongue-tied by authority': *Elizabethan and Jacobean Dramatic Censorship*. Manchester: Manchester UP, 1990.
- Duffy, Eamon. *The Stripping of the Altars: Traditional Religion in England, c.1400- c.1580*. New Haven: Yale UP, 1992.
- Dutton, Richard. *Mastering the Revels: The Regulation and Censorship of English Renaissance Drama*. London: Macmillan, 1991.
- Gifford, George. *A Briefe discourse of certaine points of the religion, which is among the common sort of Christians, which may be termed the Countrie Divinitie. With a manifest confutation of the same, after the order of a Dialogue*. London 1581, 1598.
- Hamilton, Donna B. *Anthony Munday and the Catholics, 1560-1633*. Aldershot: Ashgate Publishing Limited, 2005.

- Harpsfield, Nicholas. *The life and death of Sr. Thomas Moore, knight, sometymes Lord High Chancellor of England / written in the tyme of Queene Marie by Nicholas Harpsfield.* Ed. Elsie Vaughan Hitchcock. London : Oxford UP, 1963.
- Monta, Susannah Brietz. *Martyrdom and Literature in Early Modern England.* Cambridge: Cambridge UP, 2005.
- Munday, Anthony, and others. *Sir Thomas More: A Play by Anthony Munday and Others.* Ed. Vittorio Gabrieli and Giorgio Melchiori. Manchester: Manchester UP, 1990.
- Pilarz, Scott R. *Robert Southwell and the Mission of Literature, 1561-1595: Writing Reconciliation.* Aldershot: Ashgate, 2004.
- Questier, Michael. *Catholicism and Community in Early Modern England: Politics, Aristocratic Patronage and Religion, c. 1550-1640.* Cambridge: Cambridge UP, 2006.
- . *Conversion, Politics and Religion in England, 1580-1625.* Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Rowland, Richard. "Should We Like Munday After All?" rev. of *Anthony Munday and Civic Culture: Theatre, History and Power in Early Modern London 1580-1633*, by Tracey Hill and *Anthony Munday and the Catholics, 1560-1633*, by Donna B. Hamilton, *The Cambridge Quarterly* 36.4(2007): 365-69.
- Scarisbrick, J. J. *The Reformation and the English People.* London: Blackwell, 1984.
- Shell, Alison. *Catholicism, Controversy and the English Literary Imagination, 1558-1660.* Cambridge: Cambridge UP, 1999.
- Southwell, Robert. *The Poems of Robert Southwell, S. J.* Ed. James H. McDonald and Nancy Pollard Brown. London: Oxford UP, 1967.
- Stapleton, Thomas. *The Life and Illustrious Martyrdom of Sir Thomas More by Thomas Stapleton, In the Translation of Philip E Hallett.* Ed. E. E. Reynolds. London: Burns & Oates Limited, 1966.
- Walsham, Alexandra. *Church Papists : Catholicism, Conformity, and Confessional Polemic in Early Modern England.* Woodbridge, Suffolk: Boydell Press, 1993.
- Wilson, Richard. *Secret Shakespeare: Studies in Theatre, Religion and Resistance.* Manchester: Manchester UP, 2004.